

社会人学生の進学の動機とリカレントな学びの諸相

ー 保育士・教員養成課程の場合 ー

白 山 真 澄

東海学院大学短期大学部幼児教育学科

要 約

本稿の目的は、教員養成課程で学ぶ社会人学生のライフストーリーをもとに、彼らの進学の動機とリカレントな学びに関するニーズを明らかにすることである。日本の大学進学率は56.7%で、量的にはユニバーサル段階に達しているが、中等教育修了後ただちに高等教育に進学する者の割合が高いフロントエンド・モデル型であり、誰もがいつでも高等教育を受けることができるユニバーサル・アクセスの段階には至っていない。一方、18歳人口激減期の日本では、社会人の大学進学者の量的拡大が求められている。そして、受け入れ機関としての大学は、社会人学生の要請に応える教育プログラムの開発が課題となっている。社会人学生に関するデータは極めて少ないため、本稿で明らかにされた社会人学生の諸相は、今後、生涯学習の一環として、大学がその機能を生かし新たな役割を築くための前提を提供することができると思われる。

キーワード：教員養成、社会人学生、生涯学習、リカレント教育

1 はじめに

日本の大学・短期大学進学率は56.7%（2011年度）で、量的にはユニバーサル段階に達しているが、中等教育修了後ただちに高等教育に進学する者の割合が高いフロントエンド・モデル型であり、年齢層が上がるにつれて高等教育修了者の割合が低くなっている。諸外国と比較すると、OECD諸国の平均では25歳以上の大学生の割合は20.6%であるが日本では2.0%に過ぎない。また、アメリカでは高等教育学歴取得の割合が、どの年齢階層でもほぼ一定であるが、日本は年齢階層が上がるほど高等教育学歴取得率が低い（文科省2009）。すなわち、日本は諸外国と比較して、中等教育修了後ただちに高等教育に進学する者の割合が高く、一旦就職等した後、高等教育に進学する者の割合が非常に低く、また、年齢が上がるにつれて高等教育修了者の割合が低い。日本は、職業を経験した後、高等教育に進学するリカレント・モデルが浸透しているとはいえ、誰もがいつでも自らの選択により高等教育機関に進学できるという「ユニバーサル・アクセス」の段階には至っていない。

英米における成人の高等教育の蓄積は長く、アメリカでは、1960年代から80年代にかけて成人学生やパートタイム学生の数が増加し膨らみ（スタブルフィールド2007）、イギリスでは成人学習者のための全国拡張カレッジが1963年に、公開大学が1969年に創設された（ペリー1979、安原2014）。成人学習論も厚く展開されており、ノールズ（2002）は、成人の学習への動

機づけは自尊心や自己実現などの内面的なものが重要であり、成人学習の支援者の役割は、学習者の自己決定学習を支えることであるとして成人者学習論「アンドラゴジー」を唱導した。メジロー（2012）は個人の学びによる認識の変容に着目して、自己決定学習は学習者の自己省察の過程にあると位置づけている。

一方、18歳人口激減期の日本では、18歳人口を主たる入学者として想定する現行の大学教育を、年齢を問わずに専門知識技能を身につけられる場へと転換するために、社会人、高齢者等の大学進学の実質や量的規模の拡大が求められており（文部科学省2009）、受け入れ機関としての大学は社会人学生の要請に応える教育プログラムの開発および提供が課題となっている。風間・荻原・染谷（2014）は短期大学に入学した社会人学生とストレーテ学生意識調査から、専門性獲得やキャリア形成に対する社会人学生の高い意識を報告し、稲垣（2009）は経済的負担、家庭内役割、仕事との両立などの困難を乗り越えて大学へ再入学した女性社会人学生の進学動機と進学実現のための促進・抑制要因を析出した。しかし、日本の高等教育機関における社会人学生像の現実に対する研究は端緒についたばかりである。本研究では、社会人学生が大学にどれだけ在籍しているかという実態を明らかにしたうえで、教員養成課程における社会人学生がどのように学んでいるか、個々の学生のライフにスポットをあて、大学における社会人学生像のリアリティを描いたうえで、かれらの学びのニーズを検討する。社会人学

生のデータは極めて少ないが、だからこそ、個人的で詳細な語りからリアルな現実を抽出することの意義は大きいと考える。

2 日本の大学の社会人学生受け入れ状況

中央教育審議会資料（2009）によると、大学学部への社会人入学者数は1998年度をピークに減少傾向であり、近年は通学制、通信制ともに社会人入学者数が減少している。大学院への社会人入学者数は、専門職学位課程と博士課程では近年は増加傾向がみられる。直近の学校基本調査をもとに、大学における社会人学生の在籍状況を推計すると図1のようになる。学校基本調査は年齢別に集計されているため、ここでは短期大学入学者のうち20歳以上、大学22歳以上、修士課程26歳以上、博士課程30歳以上の入学者を社会人として推計した。この推計によると、短期大学は規模は小さいながら成人の入学者が4.5%と健闘している。大学院は修士課程13.8%、博士課程37.7%と高い割合を示しているが、研究者志向の学生と高度職業人とが混在しているためストレート学生とリカレント学生の線引きは難しい。最も少ないのは大学の0.8%である。

3 調査の方法と分析の視点

社会人学生にとって、身近に高等教育機関にリカレント入学を果たしているロールモデルは無いに等しい。にもかかわらず自ら探し求め、選択し、どのように進学経験を果たしたのか、本研究では社会人学生の進学の動機と社会人としての学びの関連性や意義を追う。このため、ライフストーリーの手法を用いる。ライフストーリー研究とは、変動する社会構造内の個人に照準し、個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点を合わせ、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとするものであり、「個人的なものを社会的なものに関連付けて解釈する手法」（桜井 2002,14 頁）である。個々の社会人学生のライフストーリーに着目することにより、かれらがライフを生きていく過程とリカレントな学びの関連性が浮かび上がり、社会人学生の実態の共通項や学びに関するニーズが明らかになるであろう。

(1) 調査の対象と方法

この調査では、短大、四大、高度職業人系大学院の社会人学生およびその修了者を対象に、かれらのリカレントな就学経験にまつわるライフストーリー・インタビューを行った。筆者は社会人大学院生を経験したのち、

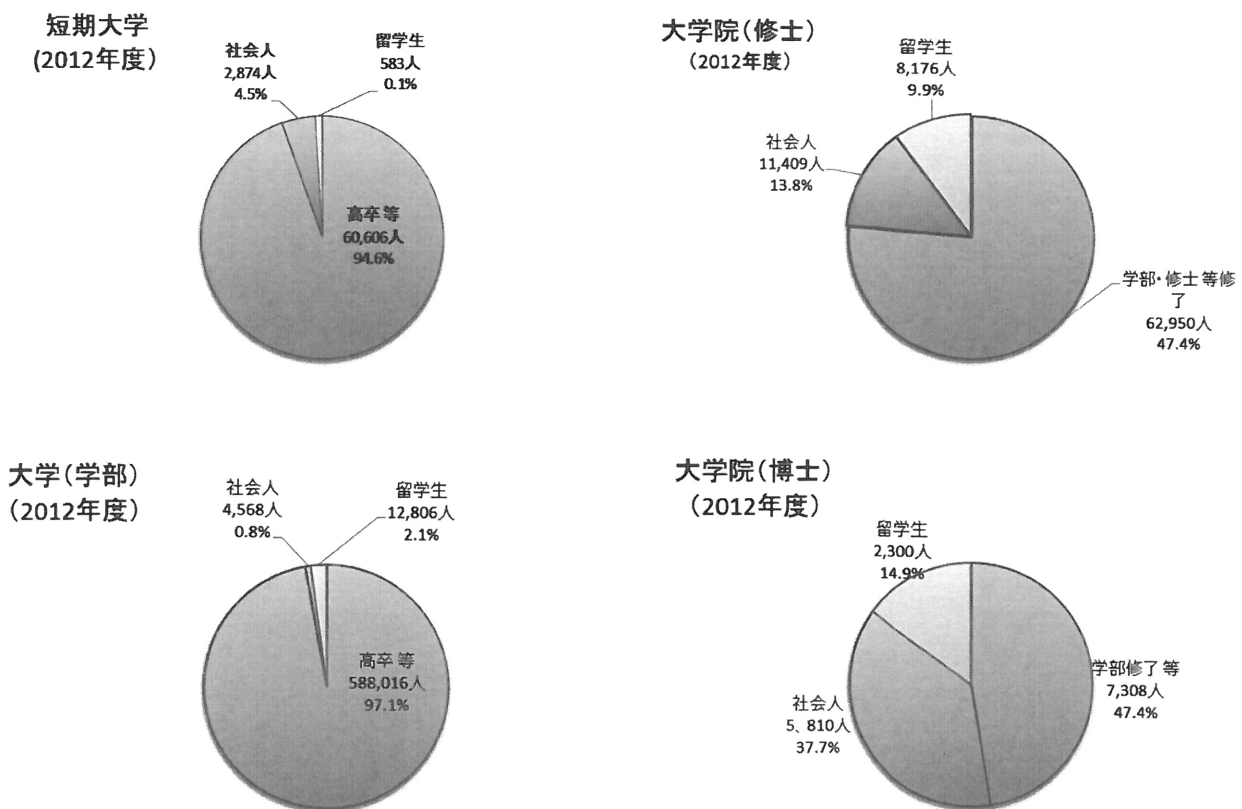


図1 大学における社会人学生の入学者数（2012年5月1日現在）
（文部科学省生涯学習政策局政策課「学校基本調査報告書（高等教育機関編）」より）

現在は幼児教育学科の教員をしている。筆者自身の社会人学生時代の知人、現在の勤務校の社会人学生からインタビューを始め、その知人の紹介など、人間関係のネットワークを利用して対象者を雪だるま式にサンプリングし、11名の対象者に各1～3回、語り手と聞き手が対話的なやり取りを繰り返す相互作用的なインタビューを行った。さらに録音を書き起こした逐語記録を、内容やエピソードによって区分し再構成した。再構成したデータから共通項を見つけ出し、構造的諸関係のパターンを抽出した。今回データとして用いるのは2014年6月からは2015年5月までに行ったインタビューである。インタビューは現在も継続中であるが、本発表では「進学動機」と「社会人学生の学び」に焦点を当てて分析を行う。

(2) 分析の視点

まず、インタビュー対象者をⅠ群（短期大学）、Ⅱ群（大学通信課程）、Ⅲ群（大学院）の三つの群にわけ、各群からFさん、Gさん、Kさんを抽出する。

○Ⅰ群（短期大学）：職業を得るために「保育士免許を取得したい」Fさん

○Ⅱ群（大学通信課程）：中・高教員免許は取得済みだが、「小免を取得したい」Gさん

○Ⅲ群（大学院）：長い教職経験をもつがさらに「専門性を高めたい」Kさん

次に、この三人のライフストーリーの要旨を提示し、

「進学動機」とその背景、「学び」の期待と現実を、多様性と差異性に注目しながら洗い出す。さらに他のインフォーマントの事例も加味して、ある社会的対象としての社会人学生のリアリティの断片をとらえたい。対象者11名の属性等は表1にまとめた。なお、プライバシー保護のため、分析に支障のない部分は、曖昧な表現をしたり若干の修正を加えたりするなどの工夫を施した。

4 社会人学生のライフストーリー

(1) Ⅰ群（短期大学）：職業を得るために「保育士免許を取得したい」Fさん

シングルマザーのFさんは郵便局のバイク便パートで家計を支えていた。長男が中2のとき、知的障害だという判定をもらった。

<進学動機>

「それまでは、一生懸命働いて普通に暮らしていければいいと思っていたが、知的障害の子をどう育てたらよいかわからず、悩んだ。この子を一生、私が面倒見なければならぬ。そのためにはずっと長くできる仕事でなければならぬ。今のパートの仕事では定年もすぐ来るし、最近の時給が下がり時間も短縮されて不安定だ。30代の頃はよかったが、40代になると年とともに体がきつくなってきた。炎天下も雨降りの日もバイクで配達。雨や雪の日はすべるし交通事故が怖い。自分の命が大事

表1 インタビュー対象者

群	仮称	入学時年齢	性別	進学前の学歴	もっている資格・免許	入学時の前歴	リカレント入学	在学中の職業等	新規取得(予定)資格・免許	調査時点での所属・職業
Ⅰ群 短期大学	A	20代	男	商業高校	全商簿記2級、電卓検定1級、ワープロ検定1級	家具製造工場	幼児教育学科	フルタイム学生	保育士・幼稚園教諭免許	幼稚園講師
	B	20代	女	四大		会社員事務	幼児教育学科	フルタイム学生	保育士・幼稚園教諭免許(取得予定)	短期大学2年生
	C	20代	女	四大	バントワリング1級指導員、日商簿記2級、ワープロ検定1級、情報処理検定1級、等高校教諭免許(商業)	会社員事務	幼児教育学科	フルタイム学生	保育士・幼稚園教諭免許	保育士
	D	30代	女	四大		主婦・パート	幼児教育学科	主婦・パート	保育士・幼稚園教諭免許(取得予定)	保育園事務
	E	40代	女	商業高校	日商簿記3級、珠算2級	主婦・パート	幼児教育学科	主婦・パート	保育士・幼稚園教諭免許	短大2年生
	F	40代	女	短大		郵便局パート	幼児教育学科	パート	保育士・幼稚園教諭免許	保育士
Ⅱ群 大学通信課程	G	20代	女	音大(声楽科)	中学校教諭免許(音楽) 高等学校教諭免許(音楽)	音楽大学学生	小学校課程	小学校支援員	小学校教員免許	高校非常勤講師 音楽教室主催 子どもミュージカル指導者
Ⅲ群 大学院	H	20代 20代	女	芸大(彫刻科)	中学校教諭免許(美術) 高等学校教諭免許(美術)	①芸術大学学生 ②芸術大学大学院生	①修士課程 ②専門学校	①フルタイム学生 ②作家	専修免許	中学校教諭
	I	20代 20代 50代	男	教育大(社会科)	小学校教諭免許 中学校教諭免許(社会) 高等学校教諭免許(社会)	①小学校教師 ②小学校教師 ③教育委員会主事	①専修科 ②修士課程 ③博士課程	①フルタイム学生 ②フルタイム学生 ③教育委員会主事	専修免許	短期大学教授
	J	40代	女	四大(外国語学部)	小学校教諭免許 中学校教諭免許(英語) 高等学校教諭免許(英語) 日本語教師資格	小学校教諭	修士課程	小学校教諭		小学校教諭
	K	50代	女	四大(児童教育学科)	幼稚園教諭 小学校教諭 特別支援学校教諭免許	小学校教諭	修士課程	小学校教諭	専修免許 臨床発達心理士 臨床発達カウンセラー	教育委員会指導員

だと思う。もしものことがあったら、子どもたちの面倒を誰が見てくれるのかと思う。やってるときは楽しかったが、郵便局は7年勤めてやめた。」

<受験勉強>

「働くための資格を取ろうと思い、最初は看護師の学校を受けるために勉強した。でも勉強の内容が難しく、看護師養成学校を受けたが落ちてしまった。結局その1年は棒に振った。昔から保育士への憧れもあったし、早く資格が取れるということで、自分が卒業した短大なら知ってる先生もみえたので、息子が高2の時に自分の母校の幼児教育学科に再入学した。」

<学生生活と家庭的背景>

「今は夜8時から12時までスーパーの品出しの仕事をやっている。お金がないと生活できないから。子どもを朝6時半に送り出して、私は少しゆっくりして大学の授業に出る。ゆっくりできるのは今年になってから。去年は娘が大変だった。中1の夏休み過ぎからいじめにあって3学期は学校にいけなくなった。中2はずっとそれが続いた。今は中3で、やっと休まずに通えるようになった。去年は気が気じゃなかった。娘のことを思うと、私が大学に行っていていいのかなと悩んだ。でも娘は、『お母さん大学行っててすごいね』と喜んでくれる。養護学校高等部に進学した息子は水泳が上達し、ジャパン・パラリンピックに出場するほどになった。びっくりしているけど。息子は高校生になってから得意な分野がやっと分かった。今までいじめられたりしたが、運がめぐってきたと思う。」

(2) II群(大学通信課程):中・高免許は取得済みだが、「小免を取得したい」Gさん

Gさんの両親は共に音楽が好きで、寺の住職である父は本堂の隣に音楽ホールとしても使える立派な別棟を建て、地域住民や子どもたちの合唱団を組織している。

<進学動機>

「私は母のお腹の中から、ここで歌っていた。子どもの頃、吃音があり本読みのたびに笑われてとても嫌だった。弟と二人で合唱とマリンバとピアノをはじめてから、吃音も直っていった。そのころから音楽の先生になりたいと思っていて、音大卒業時に中学校音楽の採用試験を受けたが落ちた。子どもが好きで子どもたちに音楽を教えたかったので、小学校の先生になりたいと思い、通信課程で小免を取ることにした。しかし両親は、音大で中高の免許取れたのになぜ小免が必要なのかと大反対。2年間、小1支援員と実家の寺の手伝いをしながら通信教育で勉強した。」

<学生生活と学び>

「通信で勉強するのは大変だった。自分で勉強してレポート書いて提出。孤独だったし、音大を出て小1支援員なんて大学生と同じだという負い目を感じていたが、スクーリングに行って初めて仲間がここにいると思った。年代はばらばら。何度も教員採用試験受けてだめで俺は結婚して子どもも生まれたから受からないとだめなんだっていう人や…。両親は寺の仕事を手伝うようにと、厳しかった。夕方までは手伝うから7時以降は自由にさせてと、親に誓約書を書いた。7時からはマクドに行っ

<教員採用試験>

て12時まで勉強した。過去問を全部暗記し、家で実技を練習した。」

「3回目の教採は小中共通枠で受験した。試験の1週間前に交通事故で鞭打ちになり、ペンも持てない状態だった。4Bの鉛筆で丁寧に書き、ピアノ、弾き歌い、サックスの演奏をしたが思うように発揮できず、もうだめだと落ち込んだ。小1支援先の小学校で結果発表の時間になると、先生方に職員室でパソコン見ておいでって言われ、番号があって、その時は涙が出て泣けてきた。クラスに飛んでいって担任の先生に合格を告げると『よかったね、よかったね』と言われ、子どもたちの前でワーツと泣き出してしまった。子どもたちが『どうしたの、先生、どうしたの』って…。」

(3) III群(大学院):長い教職経験をもつが、さらに「専門性を高めたい」Kさん

Kさんは6人兄弟の長女で常に母の片腕として育った。人の役に立てることが自分の立ち位置であると同時に、自分は母から十分に愛情を受けていないのではという満たされない思いも抱えていたという。家庭という見えない場で、自分と同様のつらい立場におかれている子、虐げられている子に手を差し伸べ、手助けをしてあげたいという思いから小学校教師になった。

<進学動機>

「新任から3年目、始めて1年生を担当したときに、知的障害の子が入学してきた。その子に何かしてあげたいと思い、また自分も自閉症について関心があったので、この年から認定講習を受け始めた。毎年少しずつ単位を取って特別支援教育の免許を取得した。

長女が大学を卒業した年、重い病気のため8歳で亡くなった次女の代わりに自分が学ぼうと思い、教育大学大学院に入った。50歳の時だった。大学院に行く3年ほど前からLD(学習障害)研究会に参加しており、そこでT先生と出会った。T先生が、大学院に入れば発達障害について学ぶ仲間が増えるよと勧めてくださった。そ

の当時は発達障害について話し合う場も少なかったの
 そういう場ができることに魅力を感じた。」

< 学生生活と学び >

「大学院修士課程では障害児教育を専攻した。私は児童教育学科卒だったので、心理系の基本をきちんと勉強する機会が必要だと思い、大学院で勉強しようと思っていたが、大学院は基本を学ぶところではなく、実は研究するところだった。学部で勉強していない分、自分で調べたりして学びおした。大学院は仕事をしながら、平日の夕方と土曜日に通った。集中講義はほとんど夏休みにとった。夜は2回交通事故を起こしたかな。自分でぶつけただけだけど。疲れてるから。2年分の学費で4年間在籍できる長期履修制度を利用するつもりだったけど、いざはじめてみると勤務と学業の両立は時間的にも精神的にも厳しく、4年間もそんな生活は続けられない、ノイローゼになる、死んでしまうと思い、急いで修士論文を書いて2年間で駆け足で修了した。修論はきつかった。土日は修論にかかりきり。冬休みはほとんど修論。」

< 家庭的背景 >

「主人は嫌だったと思う。応援まではしてないが、反対もできない。社会人になった長女は留守がちで、主人は一人で夕食を食べなくてはならないし、気の毒だった。大学院修了の翌年に主人が亡くなった。だからそんなことはじめなければよかったと後悔もした。でも勉強を始めると、仕事の実践経験と合わせて改めて腑に落ちることが多い。」

5 社会人学生の入学の動機

社会人学生の進学の実質は「自分探し／キャリア変更」「資格・免許取得」「専門性向上」の3つに分類できる。Fさんは生計を立てるための安定した職に結びつく資格として保育士免許取得を目指した。Gさんは「子ども」に「音楽」を教えたいという夢を叶えるために小学校教諭免許取得を目指した。若いGさんにとってそれは「免許取得」と同時に「自分探し・キャリア形成」の過程でもあった。Gさんのライフストーリーは、その後もキャリア模索の過程が続いていく。Kさんは教師として現場で出会う発達障害の子どもたちをいかに育てるか、専門性向上を求めて大学院に進学した。次に他の対象者がどのような動機で進学に至ったのかを整理する。

(1) 自分探し／キャリア変更

20代の若い社会人学生は「自分探し／キャリア変更」を実現するために進学する例が多い。進学前の学歴は高校卒だけでなく、短大卒、四大卒まで幅広い。「高卒→短大」等といったグレード・アップ型と、「四大卒→短

大」等へ進学するグレード・ダウン型がある。社会人経験を経ることで新たな方向性を求めたり専攻をかえる必要からグレード・ダウンして進学したのであろう。しかし、特に短大進学者が一様に言及したのはグレードのアップ・ダウンではなく「その年で…」という他者の視線と「この年で…」という自らの逡巡である。年齢相応ということに対する意識は若い世代のほうがより強く感じているようだ。一方でこのような年齢に対する気後れは、学生生活が軌道に乗ると同時に乗り越えていく様子が、かれらの語りから伝わった。

①工場勤務から保育士へ

高卒後工場勤務をしていたAさん(21歳)は仕事を2年でやめて短大に進学した。今なら四大へ進学した友人たちと同じ年に卒業できるので、社会に出るときに年齢で不利になることは無いだろうと考えたという。

「高校生の頃、保育士を目指す姉の姿を、男の子ながら…、いいなあと思っていた。先生や母に話したが、周りの反応はよくなかった。男性の保育士ということで給料面などを含めていろいろと…。男性は少ないし世間体が…というイメージだから。勧めてもらえないし、就職をした方がいいという周りの意見を飲んで工場に就職した。会社ではしんどいなあという忙煩期がある。朝7時に出勤して夜は10時まで仕事。遅いときは11時くらいまで働くこともあってそれがつらかったかな。たまたましんどい時期に、姉のところに大学祭の案内が来た。それを見て気になってホームページで調べ、オープンキャンパスと大学祭に、母に内緒で一人で行った。いろいろな企画を見て、ここ、すげえなあと感動した。子ども向けの企画で、学生が子どもと遊ぶのを見たら変わりましたね。やりたいことが明確になった…みたいな。」(Aさん)

②子どもと関わる仕事がしたい

Bさん(25歳)は大学で英語と中国語を専攻し、卒業後は企業に就職した。しかし1年で退職してオーストラリアに語学留学した。帰国後、別の会社に就職したが、子どもに関わる仕事への憧れが募り、幼稚園教諭をしている友人に背中を押され、短大への入学を考えるようになった。

「普通は一筋が理想。私はあちこちに行ってたから短大に入るのも迷いがあり、仕事をしながら1年考えた。短大の社会人枠について調べたりオープンキャンパスに参加して情報を集めた。正直に言えば、オープンキャンパスで出会うのは高校生ばかりなので、あー、ちがうなと思った。相談コーナーで社会人枠について相談したら、大学の先生に『あーそんな枠があるの?』と言われ、

あー、こういうことなのかなあと冷めた気持ちになりながらも、教務課に聞きに行った。詳しい説明を受け、社会人学生は授業料減額の恩典があることを知り、受験を決めた。以前は英語をバリバリ使えるような仕事があったと思っていた。今は幼児教育に関わりたい。一生のうちで思い切り勉強する時期があってもいいと思う。今がその時。」(Bさん)

③高校教師から保育士へ

Cさん(27歳)は高校講師をしながら教員採用試験をうけたが採用されず、一般企業に転職した。教育に携わりたかったので、実家が経営する保育園で保育士として働くために短大の幼児教育学科に入学した。

「高校時代はバントワリング部の活動が楽しかった。県大会はいつも優勝。全国大会でも団体・個人ともに上位入賞の成績。高校教師になってバントワリングの部活動を指導したかった。大学は経営学部卒業で企業に就職する学生が多かったが自分は教職を目指し、県立高校商業科の常勤講師になった。若い教員なので県内の遠隔地に配属され、家を出て一人暮らしをしていた。しかし正規の教員になるのは難しい。常勤講師をしながら3年間採用試験を受け続けたがなかなか正規採用されなかった。そのため、違う仕事をやってみようと思い民間企業で経理の仕事についた。両親が民営化保育園をはじめたのを機に、やってくれたらうれしいと言われた。教育関係にはもともと興味があるので、保育士・幼稚園教諭免許が取れたら自分の園で先生になる。」(Cさん)

(2) 資格・免許取得

教員免許取得を目的とする進学には、Fさんのように「生計を賄う職を得る」ため、あるいはGさんのように「希望する教職に就く」ためという二つの方向性が見られた。30代、40代になってから短大で資格・免許取得を目指すDさん、Eさん、Fさんの職業履歴を見ると、結婚後の女性の転職は繰り返すほど条件が厳しく不安定な仕事にダウンしていくことが明白である。三人とも最初の卒業時には一般企業に就職している。しかし、結婚、出産、育児を経て再就職したのはパートタイムの仕事である。家事や育児との両立のため三人はそれを当然のこととして受け止めているが、Fさんのようにシングルマザーとして生計を担う立場になると条件は俄然厳しくなる。

一方でHさんは、自由業の夫から定収が得られず家計が逼迫し、「どうやりくりしていたのかわからないくらいお金が無かった。」という家庭状況の中で、「自分が働く」と決め、子育てが一段落した35歳のときに中学校講師として教職をスタートした。採用試験も合格し現在は中学校教諭として働いている。Hさんは教師を志して

いたわけではないが、取得していた専修免許と本人の力量が奏功して現在はバリバリの現役教師として働いている。Dさん、Eさん、Fさんが求める教員免許は、女性にとって男女平等、年齢差別なし、安定雇用の数少ない職種であり、Hさんのようにうまく活用し再スタートをすれば、社会人としてのエンパワーが保障されるというメリットは大きい。

(3) 専門性向上

Ⅲ群の社会人学生は、自らの社会人経験の中から生じた課題をより深く追求するべく専門性向上を目指して大学院に進学した。かれらの学びについては第8節で詳しく述べる。

6 進学を実現するための要件

高等教育機関への進学を実現するためには、18歳の学生も社会人学生もそれぞれ入学試験に合格しなければならない。しかし、社会人学生にはそれ以外にも本人が事前にクリアしなければならない特有の要件がある。ここではそれを整理する。

(1) 年齢に対する固定観念克服

どの対象者も身近に社会人学生のロールモデルは存在せず、自分の求めるものを手探りで探していた。「この年で」もう一度学生になっていいのか、進学してそこに自分の居場所はあるのか、若い学生とやっていけるのか、不審に思われるのではないかという不安であり、年齢が高いことに対する負い目を感じているとさえいえる。それでも一歩を踏み出せたのは、背中を押してくれた誰かの存在である。誰かが肯定し励ましてくれると、その先に何があるのかという不安を感じつつも勇気を出して一歩を踏み出すことができる。たとえばさやかであっても、一人のキーパーソンの「時宜に合うことば」が道を選ぶ重要な契機となる。

「オープンキャンパスは3校行った。他大学では、対応してくださった先生に『あなたが…?』と言われ、『その年で?』と言われたようで、『社会人募集してるじゃない…』と思った。この学校は対応してくれた先生が『どうぞどうぞ』『そういう方がほしいんです』と受け入れてくれたので、ここしかないと思った。」(Eさん)

(2) 家族の承認と支え

一般に、人は常識外の方角転換を認めにくい。前例の無いことに挑戦しようとする人を、周囲の人は自分の常識の範囲で判断して、反対したり懸念を伝えたりする傾向がある。Gさんの両親は、せっかく大学を卒業して帰ってきた娘が、取得した中高の教員免許を生かさず、小学校教師になるため、通信課程に再入学することには反対

だった。Gさんの両親のように関係が近ければ近いほど、心配が先回りして、引きとめようとする傾向がある。

途中変更せずに初志を貫くようにという励ましの意味もあるかもしれない。しかし、今回の対象者の家族は、Fさんの娘やKさんの夫のように不自由でも何も言わずに協力してくれる例、Aさんの母のように最初は心配したがやがて応援してくれるようになった例、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんの家族のように最初から理解を示してくれた例がほとんどであった。だからこそ、かれらは常識の範囲外の進学が実現できたのであろう。かれらの存在は氷山の一角であり、その水面下には小さな芽のうちに摘まれてしまった意志が多く沈んでいることだろう。社会人学生の量的拡大を図るには、進学したくても家族に反対された人、いい反応が期待できないので最初から諦めている人、学びたい思いはあっても進学という発想さえ浮かばない人という隠れた需要に気づくことから始まるといってよい。

(3) 学費

20代の青年層では自分で働いたお金を学費に当てるか、一部を親に援助してもらう例が多かった。しかし、中高年の女性にとっては、家計から自分のために多額の学費を捻出することに後ろめたさを感じ、必ず働いて返すと決心している例、あるいは婚家には実家の両親に負担してもらったということにして、結婚前の貯金で賄った例などがあった。既婚者にとっては「自分のために高い学費は払えない」というのが一般的な声である。一方、教員などの仕事と両立をした例では、学費は何とかなるが、職業との両立、時間の工面に苦労している。

(4) 時間の工面

社会人学生にとって仕事や家庭的役割との両立は大きな課題である。Aさん、Bさん、Cさんのように仕事をやめてフルタイムの学生になった場合はよいが、勤務を継続しながらの社会人学生は家事や育児、仕事との両立に苦労している。子育て世代の社会人学生は土日の補講や行事への参加が難しく、免許取得のための教育実習も負担が大きい。責任の重いフルタイムの仕事をしている社会人学生は、前述のKさんのようにまず第一に仕事の責任を果たし、隙間の時間で修士論文を執筆する苦労を語っている。時間のやりくりの例としてDさん、Eさん、Fさんの語りを記す。

「夜9時ごろ子どもを寝かせて一緒に就寝。朝3時半に起きて子どもが起きる前に家事をやる。夕飯の洗いや朝食の支度、洗濯機を2～3回回す、主人のお弁当作りなど。夜9時に子どもの添い寝をして私がすぐ起きると

子どもも全然寝ない。私が一緒に寝ちゃったほうが効率が良いと思って。睡眠は6時間で十分かなと思う。子どもを小学校と保育園に送ってから大学に来る。1時間でも空けば実家が経営する保育園に出勤して事務の仕事をする。」(Dさん)

「朝3時半に起きてお弁当を作り、4時40分に家を出て5時から8時までパン屋でパート。それから学校へ。授業後家に帰って、主人の帰宅が早かったり遅かったりで…。朝会わないから夜はちゃんとしたいし、後片付けもしたいし。洗濯も朝できないので夜しなければならぬ。あつという間に12時になってしまう。」(Eさん)

「今、びっくりするほど忙しい。幼稚園実習が終わった後、宿題があつてそれをもっていったら、次に挨拶に行つた施設実習先からも宿題が出て…。テストが終わるとすぐ施設実習。子どもがいるので、施設実習は宿泊実習ではなく通いにしてもらつた。」(Fさん)

7 社会人学生としての学び

(1) 教職に求めるもの

教職を目指すにあたり、Aさん、Bさん、Eさん、Kさんのように「子ども」に関わる仕事がしたいという「子ども志向」の学生と、「〇〇を子どもに」教えたいという「専門性志向」の学生がいる。Gさんは音楽を子どもに教えたい、Hさんは美術を中学生に教えたい、Cさんはキャリア変更したとはいえ、最初に教職を目指したのは高校生に部活動指導がしたいという思いが原動力であった。このように、教職への初発の志向性は自分が受けてきた教育経験によって形成される素朴なイメージからスタートするが、教員としての経験を重ねる中で、Iさんは授業研究を、Jさんは日本語教育や外国人児童教育を、Kさんは発達障害児教育をというようにさらなる専門性向上を求めるようになる。

(2) 職業上の専門性向上

Ⅲ群のIさん、Jさん、Kさんの三人に共通するのは、今回の進学以前にもさまざまな学びの機会をとらえ、そこに身を投じてきた経験をもつことである。研修、認定講習、勉強会、新たな資格取得だけでなく、一端離職して別の場所に身をおいた経験等を経て、最終的に大学院進学を果たしている。そこに見られる共通項は、昇進を目指して、あるいは、あるゴールに向かって進学するというより、やむにやまれぬ専門性向上を求める思いで教育機関を探し、大学院に辿り着いたという様相である。経験を積んだ職業人としてのアイデンティティとともに、

その底流には若い世代に通じる自分探し、自己成就を希求する気持ちが伝わってくる。

①教科教育方法の高度な専門性を求めて

Iさんは教職に対する迷いを感じて教員1年目で退職し、教育大学専攻科に進学した。研究者への道も考えたという若い時期の自分探しである。しかし一端職を離れることで子どもたちと過ごした充実感を再認識し、再び教員採用試験を受けて教員に復帰した。若い教師として実践を重ねるなかで授業研究を追求したいという思いから、28歳で再度退職して教育大学大学院修士課程に進学した。修了後はまた教員採用試験をうけて3度目の教職復帰を果たした。その後は教科教育方法の実践面での指導的立場として教職に邁進しながら51歳のときに管理的立場でありつつ博士課程への進学も果たしている。修士課程で出会った恩師とは、その後、現場の実践と学術研究の相互交流をとおして成果を挙げていく長年の協働者の関係となった。さらに定年退職後も、職業生活から得た専門性と大学院で高次化した知識を生かして、短期大学教授としてセカンドキャリアを切り開いている。

②比較教育学的視点と日本語教育の専門性を求めて

Jさんは外国語学部卒業後、中学校の英語教師として教師生活をスタートしたが、海外で日本語指導がしたいという思いが強く、青年海外協力隊に応募してブラジルへ派遣された。二度のブラジル派遣のなかで日本語教師の資格を取得し、帰国後は高等学校や小学校で教師として勤務した。現在は外国人児童教育の専門性を生かして小学校に勤務している。二国間の教育現場を知る彼女は、さらに高次の専門性をもとめて45歳のときに大学院修士課程に進学し、教職と並行して修士の学位を取得した。こうして高めた専門性を次にどのように生かしていくのか、教師として、また一人の人間としての彼女の模索は続いている。

③臨床発達心理の専門性を求めて

前述のKさんも長い教師生活の中でさまざまな学びの場を求めている。26歳から毎年夏休みに認定講習に通い、特別支援学校教諭免許を取得したのをはじめ、その後も教員生活を通して常に何かを学び続けていたといえる。カウンセリング講習、発達障害に関する研究会参加などである。たまたま同年輩の友人が大学院進学を目指す姿を見て「そういう方法もあるのか…」と大学院進学を決意した。当時の彼女は大学院がどういうものか明確なイメージはなく、ただ専門性を高めたいという思いであったが、「何をするとするか、入ってみてやっとわかった。思っていたのとは違っていた。」と述べている。実践力を高めたいという思いが強く、大学院修了後は発達

障害児教育の専門性を生かして市内で中心的な役割を果たした。定年退職後は臨床発達心理士、臨床発達カウンセラーの資格を生かして教育委員会派遣により通級教室の実践に励んでいる。

8 結果の考察

社会人学生の個人的背景は多様で、進学動機や進学後の学びに関して語られた内容は多岐にわたるが、年齢層と高等教育機関の種類によってある種の傾向が抽出できた。今回登場した社会人学生は、さまざまな人生の波乱や危機を経験してリカレントな学びにアクセスしており、その目的意識は明確で、自分の抱えるさまざまな条件と折り合いをつけながら目的を達成し、その後の職業や社会生活に変化をもたらしている。

この調査で浮かび上がったのは、高等教育機関へのリカレントな進学に対する人々の認知の低さである。リカレント進学を希望するものは、年齢的役割や社会的役割から外れることへの逡巡や葛藤を感じながら、手探りで歩を進めている。青年期は教育、成人期は労働、高齢期は余暇ないし引退の時期というライフサイクルの固定概念は未だ根強いが、人生のどの時期でも、自分で機会を作ればリカレントな進学が可能であり、新しい資格や免許を得て次の方向へ進むことができるという認識を人々へ、高等教育機関へ、そして社会一般へ広げることが必要である。

(1) 進学希望者のニーズ

社会人学生の進学希望ニーズを大きく分けると「自分探し／キャリア変更」「資格・免許取得」「専門性向上」である。職業に就くため、あるいは新しいキャリアへ転向するために資格・免許を求める比較的若い世代は、学校種のアップ・ダウンにかかわらず、免許取得に直結する短期大学に進学している。社会生活や職業生活の中で出会った壁や困難を乗り越えるため、さらなる専門性を希求する中高年世代は大学院の門をたたいている。そして入学前に描いた予想とは異なる学生生活を、それぞれ咀嚼しながら目的達成のため安定的に努力し、修了後には「他の人にも勧めたい」というほどの成就感を得ている。社会人学生が求めているのは学業成果に加え、新しい視野と学びの獲得、自ら学ぶ成就感、職場とは異なる人間関係の獲得、ライフコースの充実、自分を高次化する喜び等である。リカレント進学のハードルは、社会人学生を受け入れる高等教育機関の的確な情報が乏しいこと、周囲の人の理解を得る努力が必要なこと、仕事や家庭的役割との両立に伴う困難、学費の工面、修了後の見通しの描きにくさ等である。そして最も大きな課題は、新し

く得た資格・免許を社会生活・職業生活にどのように生かすことができるか、高次化した専門性を職務にいか還元できるかという課題である。

(2) 高等教育機関の役割

この調査では、短大や四大通信課程は資格・免許授与機関としての需要があり、社会人学生のニーズに応じた社会的エンパワーメントに十分貢献できること、大学院は学究的な思考法と思索の場を提供することで、社会人学生の新しい視野の獲得や、専門性の高次化に貢献できることが明らかになった。今後、短大は地域に根ざしたコミュニティカレッジ型の教育機関として保育、看護、社会福祉、医療技術等、中級レベルの技術者養成および研修機能をその役割として担うことができる。また、大学院は社会人学生の経験に基づく課題意識を学術知でもって深化させることで高度職業人養成を担うことができる。リカレントな学びを経て高次化した人材を育成するには、効果的なプログラム開発が必要となってくる。そして各大学の受け入れ態勢を進学希望者に明確に示すことが、進学希望者のニーズに応える第一歩である。大学組織の存続と新たな展開のためにも、それぞれの大学が受け入れ学生の年齢層を広げ、ニーズを掘り下げ、機能を生かし発展させることで高等教育の新たな役割を築くことができるであろう。

(3) 社会の役割

現在の段階では、社会人のリカレントな進学による学歴アップが昇進に結びつく、転職に有利といったインセンティブは社会的に明示されておらず、個人的な意欲や動機によって時間・費用・仕事との両立等のハードルを乗り越えようとする社会人進学希望者は極めて少数派であることが明らかになった。誰もがいつでも高等教育機関に就学でき、職業上の役割向上を果たすことができるといった、就学のインセンティブが社会的に広く共有されることが重要である。そして社会は年齢による社会的役割概念から脱却し、社会人就学修了者を高次化した人材として、柔軟に活用する力が必要である。日本社会の人口構成比は今後もさらに変動し、ある年齢層の人材の枯渇や劣化が社会構造に及ぼす負荷は大きいと予測される。社会的役割や責務が年齢に規定されることによる社会的な脆弱さを是正するために、年齢でライフサイクルや人材を区切る固定化した社会から、個々人の学びの高次化体験をフレキシブルに生かす社会、年齢の多様性が生かされる社会へと転換することが求められる。本研究では教員養成課程の社会人学生を調査したが、教育者は自分の学びを直接、学習者に伝えられる存在である。教職に就く者がリカレントな学びの体験を次世代に伝える、

ロールモデルの役割を果たしてほしい。

9 おわりに

今回の調査は明らかに四大の事例が少ない。四大の事例を探ることが困難であるということは、社会人にとって四大進学ハードルが高く、かつ汎用性が低いということであろう。筆者の次の課題は四大の事例を収集し、社会人学生の要請とそれに応える四大ならではの機能を探ることである。また、各群における社会人学生の事例を生かして、成人としての学びの変容と、獲得した学びがどのようにライフとキャリアに影響するかを探りたい。誰もが年齢を問わず、生涯学習としてのリカレントな学びにアクセスできるような高等教育機関の受け入れ機能充実と社会的合意形成は今後の大きな課題であろう。

付 記

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業の助成を受けて行ったものである。(基盤研究(C)「社会人を対象にした教員養成プログラムの開発」課題番号 26381155 研究代表者：今津孝次郎)

インタビューに応じてくださった 11 名の皆様に心より御礼を申し上げます。

文 献

- 稲垣恵つ子, 2009,『社会人学生のキャリア形成過程—社会人学生体験事例集から—』奈良女子大学社会学論集, 奈良女子大学社会学研究会, 第 16 号, 95-110 頁。
- OECD, 立田慶裕監訳, 2010,『世界の生涯学習—成人学習の促進にむけて—』明石書店。
- オープン・ユニバーシティ, 浜野保樹・阿部美哉訳, 1984,「オープン・ユニバーシティの指導法—英国公開大学のチュートリアル—」MME 研究ノート Multi Media Education 第 8 号, 放送教育開発センター。
- 風間悦子, 荻原和夫, 染谷きよ子, 2014,『短期大学に入学した社会人学生の意識調査に関する研究—社会人入学生と高卒ストレート入学生の比較—』長野女子短期大学紀要, 第 13 号, 29-37 頁。
- 桜井厚, 2002,『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房。
- 桜井厚, 2005,『ライフストーリー—インタビュー質的研究入門—』せりか書房。
- スタブルフィールド, ハロルド, W.キーン, パトリック, 小池源吾, 藤村好美監訳, 2007,『アメリカ成人教育史』明石書店。Harold W. Stubblefield & Patrick Keane, 1994 "Adult Education in the American Experience: From the Colonial Period to the Present" John Wiley & Sons Inc., U.S.A.
- ノールズ, マルカム, 2002,『成人教育の現代的実践—ペダゴジーからアンドラゴジーへ—』鳳書房。Knowles, Malcom S., 1980, "The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to

Abdoragogy" Cambridge Adult Education, Person Education, Inc., New Jersey.

ペリー, ウォルター, 西本三十二訳監修, 1979, 『オープン・ユニヴァーシティー—英国放送大学の歩み—』創元社。

メジロー, ジャック, 金澤陸・三輪建二監訳, 2012, 『おとなの学びと変容—変容的学習とは何か—』鳳書房。Mezirow, Jack, 1991, "*Transformative Dimention of Adult Learning*" Jossey-Bass, U.S.A.

安原義仁, 2014, 「イギリス公開大学 (OU) のルーツ—いくつかの先駆的構想—」『放送大学』。

資 料

中央教育審議会大学分科会大学規模・大学経営部会 (第5回) 資料 3-2 (2009/12/1)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/028/siryo/_icsFiles/afieldfile/2010/03/05/1287479_01.pdf
(最終アクセス :2015/4/29)

文部科学省「学校基本調査」

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm
(最終アクセス 2015/2/4)

Adult Students' Motives for Recurrent Learning

— Cases on the Teacher Education Courses —

SHIRAYAMA, Masumi

Abstract

This paper examines the life-stories and motives of adult students in attending teacher training courses. 56.7% of Japanese people go to university: almost all straight from high school – the so-called front-end model. However, there are still barriers inhibiting Universal access by adult students. At a time when the high school population is declining, universities should adapt their educational programs to encourage greater adult student numbers. As very little is presently known about the potential demand for recurrent learning, it is hoped that the findings of this paper will contribute to improvements in the provision of such education and training.

Keywords : teacher education, adult student, lifelong learning, recurrent education

— 2015.7.9 受稿、2015.11.26 受理 —